

児童文学批評というたおやかな流れの中で

④

—いま児童文学は「いじめ」「スクールカースト」の呪縛に頓着せずパジャマガールのようにハンザキした方がいい—

細谷 建治

*ハンザキ

きどりのこの短編集『パジャマガール』（くもん出版 05年4月）の表題作「パジャマガール」に出てくるアッコがハンザキしたとき、やったぜ、とぼくは思った。

*アッコ

アッコこと佐藤篤子はいつもパジャマ姿のへんな子だ。そのアッコと、主人公のミナは、あることをきっかけにかよくなる。

アッコがミナの飼った猫を袋につめ公園の砂場に埋めている。気づいたミナはかけてつけて、アッコをつきとばす。つきとばしたミナは、アッコの顔のあぎに気づく。アッコの方は、その猫を心臓の手術でもうすぐ入院するミナの弟がかわいがっていたことを知る。おたがいにちよっとした気まずさを共有し、なかよくなる。

ふたりは公園のブランコにすわっている。

アッコは、ブランコをぐるぐるよじって、ほどきながらまわる動作をくり返している。

アッコは、ブランコをよじりながら、ナベセンが「もう学校にくるな。お前の顔なんか見たくない」といったから登校拒否していると話す。父親がなぐることを話す。ぶらんこをふつうにこぐのではなく、よじりながら話す。こんな他愛ない仕草も、ぼくはけっこう気に入っている。

そこに、同じクラスの悪ガキの岩本たちチャリンコ部隊がやってきて、はやしたてる。

パジャマパジャマパジャマパジャマ

パジャマ怪人 パジャママン!

朝から晩まで パジャマパジャマ

おまえの母さん おおでべそ!